

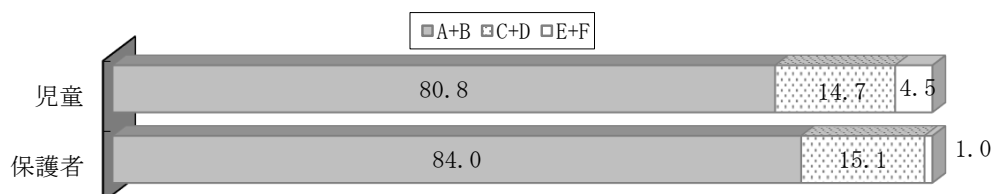
令和6年度 学校教育自己診断 小学校（共通項目）

1. 学校の生活について

児童 学校へ行くのが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

肯定的回答割合前年度比:児童-0.4%、保護者-2.9%

前年度比で、児童・保護者の肯定的回答割合が微減した。また、前年度比で否定的な回答及びわからない・無回答と答えた児童の割合が0.3%増加した。

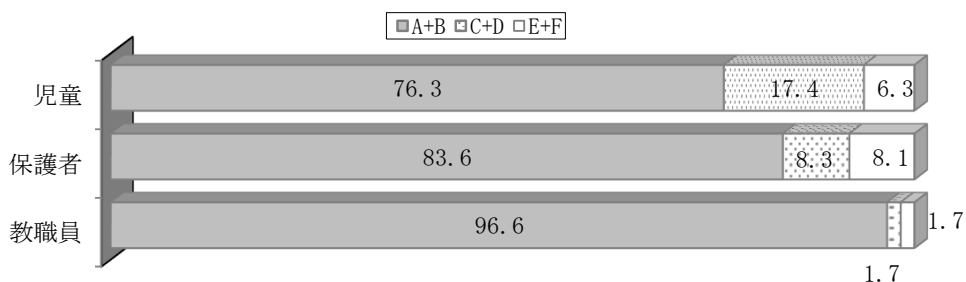
児童、保護者共に高い肯定的回答割合ではあるものの、特にこの項目については肯定的回答割合が100%となることを目指していかなければならない。上記の結果に基づくと、35人学級中の約7人の児童が学校へ行くことが楽しみではないと思っている、ということになる。児童に寄り添い、チーム学校で取り組んでいくことが重要である。

2. 「確かな学力」の育成について

児童 学校で、自ら進んで学習に取り組んでいる。

保護者 学校は、子どもが進んで学習に取り組むように工夫している。

教職員 学校では、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫改善を図っている。



〔分析〕

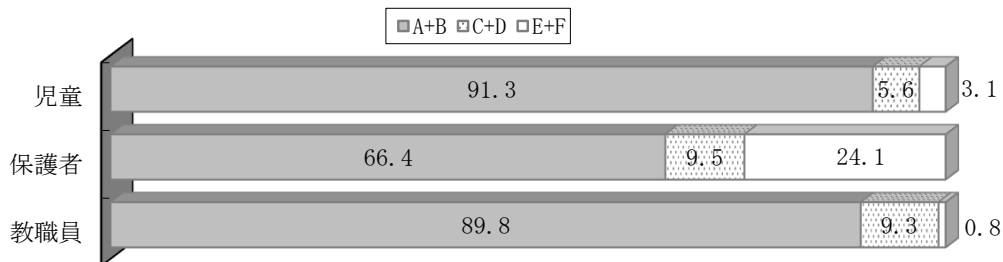
肯定的回答割合前年度比:児童-1.7%、保護者+2.9%、教職員-0.9%

前年度比で、肯定的回答割合が児童・教職員では微減、保護者では微増した。

各小学校では授業改善の取組を継続して実施しているが、それが本質的な児童の学習意欲向上に直結するのか、学習課題の設定は適切であるか等を常に振り返り、授業改善をさらに推進する必要がある。また、児童・保護者で1割弱のわからない・無回答の層に向けての発信を、引き続き行っていくことが求められる。

3. ICTの活用について

児童 学校で、コンピュータやプロジェクター、タブレット端末を使った授業をしている。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。



[分析]

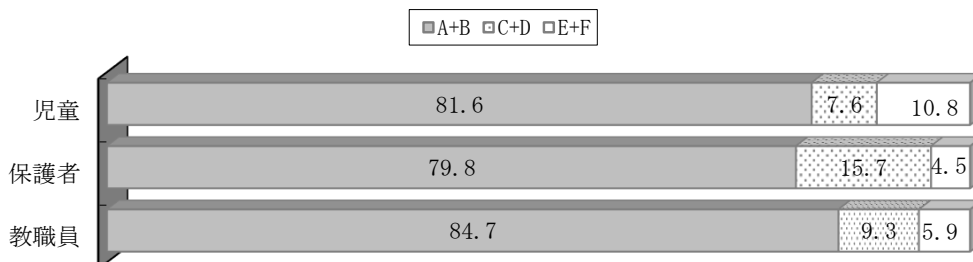
肯定的回答割合前年度比: 児童+2.7%、保護者+2.8%、教職員+6.3%

前年度と比較し、児童・保護者・教職員のすべてで肯定的回答の割合が増加した。

1人1台端末について、全ての学年で各校の教育目標に基いたICT機器の活用を呼びかけ、ICT活用の好事例収集に努めてきた成果であると分析できる。今後は、端末も持ち帰り等もさらに進め、「わからない・無回答」割合が24%を超える保護者へも適切な周知を行う必要がある。

4. 学校の通知表について

児童 通知表の内容は、納得できる。
 保護者 通知表は、よくわかる。
 教職員 学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。



[分析]

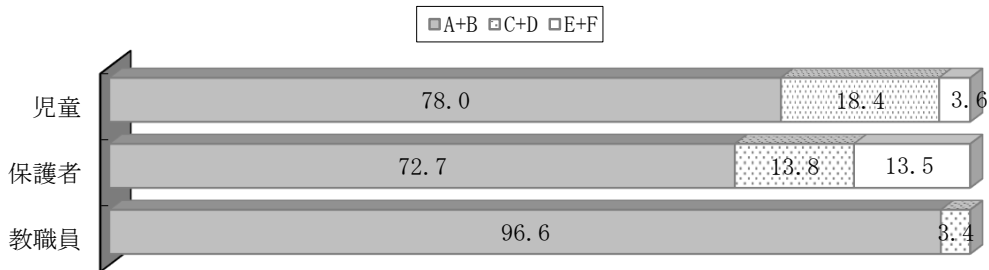
肯定的回答割合前年度比: 児童-1.6%、保護者-0.4%、教職員-4.6%

児童・保護者・教職員で前年度より肯定的回答の割合が微減した。

児童の10.8%、教職員の5.9%が「わからない・無回答」と返答したことは課題である。いずれも昨年度より増加しており、児童は学校での教育活動の結果示される通知表の内容について、教職員は学校が作成する通知表について適切な評価が行われているか「わからない」と返答していることになる。特に教職員には当事者意識を持った評価の在り方について、今一度考える必要がある。

5. 自学自習について

児童 自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、自学自習力の育成を推進している。
 教職員 学校では、自学自習力育成のため、学校全体で取り組んでいる。



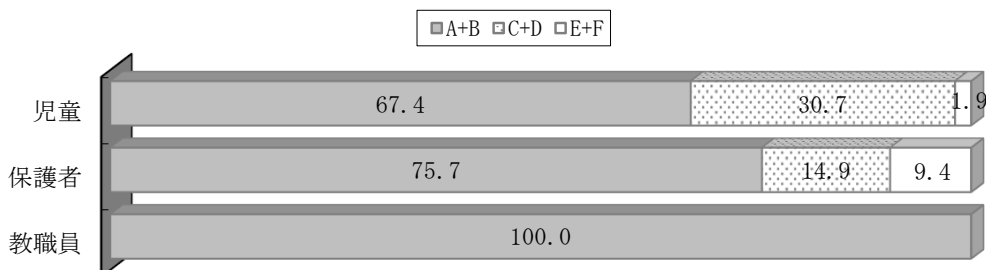
〔分析〕

肯定的回答割合前年度比:児童-0.4%、保護者-1.3%、教職員+4.0%

前年度と比較し、肯定的回答の割合が児童と保護者では微減し、教職員では微増した。
 また、保護者の回答ではわからない・無回答の割合が昨年度から微増し、約14%となった。学校公開時の掲示等による取組内容報告に加え、児童が自学自習の必要性に気づき、その成果を家庭等で共有できるような仕組みについて、1人1台端末の活用等を視野に入れて取り組んでいく必要がある。

6. 読書習慣について

児童 読書をよくする。
 保護者 学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導している。
 教職員 学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。



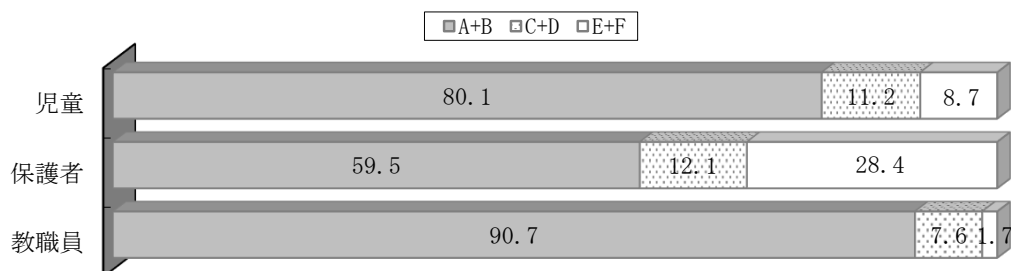
〔分析〕

肯定的回答割合前年度比:児童-1.9%、保護者±0%、教職員+6.6%

前年度と比較し、肯定的回答の割合が児童では微減し、教職員は増加した。
 また、前年度と比較すると肯定的回答割合の減少分が、否定的割合の増加分に繋がっていると分析できる。読書習慣は一朝一夕に身につくものではないため、学校図書館司書と協働した取組を継続していくことが重要である。本が手に取りやすい環境の醸成や、教職員自身が本に親しんでいる様子等、児童を取り巻く環境全体で読書を当たり前の習慣にしていく必要がある。

7. キャリア教育について

児童 学校では、役割を果たすことの大切さ(かかり活動や当番など)や自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導や役割を果たす大切さを伝える指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



〔分析〕

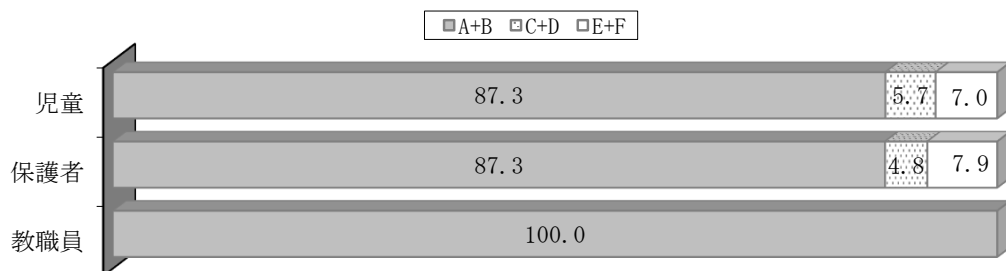
肯定的回答割合前年度比:児童-0.8%、保護者+0.7%、教職員+2.3%

前年度と比較し、肯定的回答の割合が児童では微減、保護者・教職員では微増した。

また、児童の約9%、保護者の約28%が「わからない・無回答」と回答していることから、小学校におけるキャリア教育の位置づけについて、今一度児童、保護者及び教職員が共通理解を持つ必要があると分析できる。義務教育修了後の子どもたちの姿について、改めて様々な角度から発信していくことが重要である。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

児童 学校では、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学ぶことができる。
 保護者 子どもは、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学んでいる。
 教職員 学校は、お互いの違いを認め合い、人を大切にする力を身につけるよう指導している。



〔分析〕

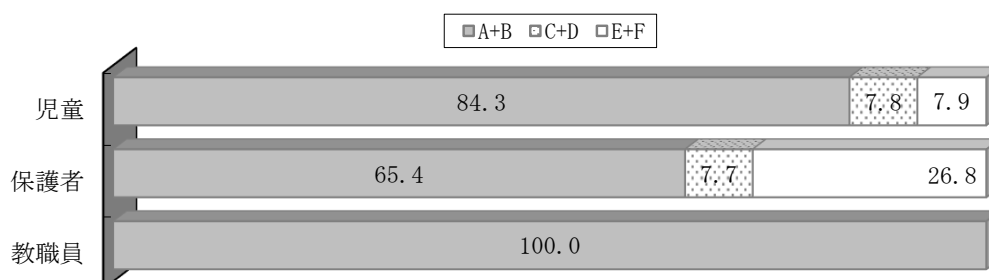
肯定的回答割合前年度比:児童-1.8%、保護者+2.1%、教職員±0%

前年度と比較して、肯定的回答割合が児童で微減し、保護者では微増した。

前年度に引き続き、肯定的回答割合が児童及び保護者で約9割、教職員で100%を維持できており、落ち着いた学習環境の基盤たる「心の教育」や規範意識を育てる授業が、各小学校で適切に実施されていることが伺える。しかしながら、否定的又は無回答・わからないと返答した層に対し、どのようなアプローチが効果的か考えていく必要がある。

9. いじめ防止・対応について

児童 学校では、いじめ防止の取組について学ぶことがある。
 保護者 学校は、いじめ防止・対応の取組を行っている。
 教職員 学校は、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。



[分析]

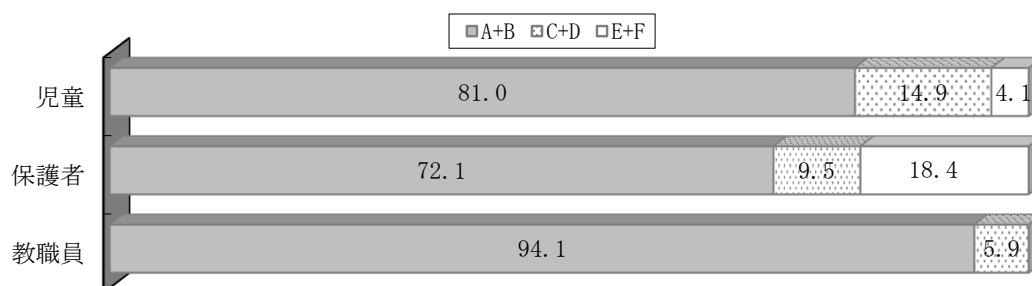
肯定的回答割合前年度比: 児童-3.4%、保護者-0.1%、教職員+0.8%

前年度と比較して、肯定的回答割合が児童及び保護者では微減、教職員では微増した。

昨年度に引き続き、保護者における肯定的回答割合が低い現状がある。キャリア教育の欄でも述べたように、小学校で行われる全ての教育活動において、いじめ防止の観点は盛り込まれてしかるべきである。保護者や地域住民への丁寧な情報の発信及び周知に努めながら、取組を続ける必要がある。

10. 「食の教育」について

児童 自分の健康を考えて給食を好き嫌いなく食べようとしている。(児童)
 保護者 学校では、子どもと食に関する話をしている。
 教職員 学校では、食に関する指導を計画的に実施している。



[分析]

肯定的回答割合前年度比: 児童+0.6%、保護者+3.7%、教職員+13.1%

前年度質問内容

児童: 給食の時間は楽しい。(低学年児童) 自分の健康を考えて給食を好き嫌いなく食べようとしている。(高学年児童)

保護者: 学校では、子どもと食に関する話をしている。

教職員: 学校では、食に関する指導を計画的に実施している。

前年度と比較し、児童の質問における低学年と高学年の差を無くしたところ、肯定的回答の割合については、児童で微減、保護者で微増・教職員では増加した。

食生活に関する指導は、学校と家庭等の連携が不可欠である。各小学校で実施している学級担任と栄養教諭等の協働による食育授業について、推進していく必要がある。